

グローバルヘルスにおける地域や大学との連携

石川尚子（医師）

経 歴

秋田大学医学部卒業

London School of Hygiene & Tropical Medicine 修士課程修了

Institute of Education, University College London 博士課程修了

専門領域は公衆衛生，感染症対策

国境なき医師団，国立国際医療研究センター，世界保健機関等で

アジアやアフリカにおける開発途上国の保健医療活動に従事



講演概要

人類はこれまでの歴史の中で、数多くの感染症と戦ってきた。2020年から世界が直面している新型コロナウイルス感染症パンデミックは、感染症の脅威とその対策の難しさに加え、一人ひとりが利害を超えて協働することの大切さを改めて認識する機会となった。

グローバルヘルスとは、地球規模で人々に影響を与えている健康課題に対し、国や地域を越えた協力を通してその解決を目指していくことを指す。歴史を紐解くと、ペストの流行に苦しめられた14世紀のヨーロッパにおける複数の共同体の協力の引き継ぎ、二つの世界大戦を経て世界規模での協力体制が確立された。2000年の国連ミレニアム宣言をもとにまとめられたミレニアム開発目標（MDGs）では、保健課題が大きく取り上げられ、母親や小児の健康問題やHIV、マラリアなどの感染症対策への取り組み、特に開発途上国への支援が世界レベルで行われた。それらは2015年からの持続可能な開発目標（SDGs）にも引き継がれている。

世界保健機関（WHO）はその憲章の中で、「健康とは、肉体的、精神的、社会的に完全に良好な状態であり、単に疾病や虚弱がないということではない」と定義している。また、「到達しうる最高基準の健康を享有することは、万人の有する基本的権利の一つである」とも謳っている。これらを達成するためには、医療関係者だけでなく、全ての関係者・様々なプレーヤーが、密な連携と協力の下にそれぞれの力を十分に発揮していくことが必須である。

大学や研究機関はその重要なプレーヤーの一つとして、様々な役割を果たしてきた。そのひとつが、科学的根拠に基づく保健医療を行うための研究とエビデンスの創出である。その結果開発された有効な予防や治療などの介入が、開発途上国における人々の健康を守ってきた。また近年グローバルヘルスにおいては、保健サービスの受益者、つまり地域住民や疾病の影響を受けている当事者など、コミュニティを中心に据えた取り組みの重要性が強く認識されている。その中で、存在する課題について大学や研究機関とコミュニティが共に研究し、現状改善を目指すというアプローチがアクションリサーチ、オペレーショナルリサーチ、あるいはインプリメンテーションリサーチと呼ばれる枠組みの中で実践されている。いくつかの例を取り上げながら、その学びや今後に向けた課題を抽出したい。

大学と地域の連携に基づく大学生の体験学習における課題 —教職ボランティア・教職インターンシップを対象として—

土屋弥生（日本大学文理学部）

経 歴

日本大学文理学部総合文化研究室准教授，学校心理士。
高等学校教師の経験をふまえ，学校教育現場での諸問題に対応するために必要となる教師の実践知について現象学的人間的な立場から研究。世田谷区立赤堤小学校学校運営委員会委員長，世田谷区希望丘青少年交流センター運営委員。各地の教育委員会等の研修会で講師をつとめる。



講演概要

コミュニティスクール（学校運営協議会制度）が広がり，公立学校は地域とともに運営する学校へと進化している。学校は児童生徒や保護者に加え，地域を巻き込んだかたちで運営されることになった。不登校対応や課題をもつ児童生徒の指導など，学校教育現場には多くの課題や問題が山積しているが，学校の抱える問題は地域社会とのつながりの中にあり，その問題のありようは地域によって異なり，地域の特性を反映しているとも考えられる。

教職課程の理論的な学びにとどまらず，地域や学校の実際のあり方を，身をもって学ぶことができる学校教育現場における体験学習（ボランティアやインターンシップ）は，教職を志望する大学生が現場で活躍するための実践的指導力を身に着けるために欠かせない，重要な学びの機会である。教職課程において学生たちは頭では多くのことを学んでいるが，教師となって現場に出たときには理論知だけでは対処できない様々な問題にはじめて直面し，疲弊してしまう。体験学習は，このギャップを乗り越えていくための実践知に触れる希少な機会でもある。

近年の教職志望者の著しい減少とそれに伴う「教員不足」といった背景の中で，地域を理解し，地域社会を巻き込んだかたちで学校教育現場を担っていく教師を養成するためには，教職を志望する大学生の体験学習の実施についても地域，学校，大学が連携していく必要があると考える。

「学校インターンシップ」は中央教育審議会答申（平成27年）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」において，教職志望者の学校教育現場における体験学習の重要性が指摘され，教員養成教育の中でその実施が求められている。現時点では教職課程に設置が義務付けられてはいないが，多くの大学では学校インターンシップの実施・試行が始まっている。しかし，「学校インターンシップ」をはじめとする教育現場でのインターンシップやボランティアについては，単に学校の労働力不足を補うものになっていたり，学生の学びが不十分であったり，学生が教職についての負のイメージを増幅させるなど，多くの課題が見られるのも実情である。

今回の講演では，大学と学校，地域の連携において質の高い未来の教師を育てていくために必要な視点，現状の問題・課題を取り上げ，大学，学校，地域のそれぞれのニーズにかなう，目指されるべき体験学習のあり方を具体的に提示したい。